

Body, Mind and beyond: 貧困が子どもに及ぼす影響を理解するために

阿部 彩

東京都立大学 人文科学研究科

貧困とは、究極的には金銭的・経済的な資源の不足である。しかしながら、貧困の理解を複雑にするのは、貧困がしばしば金銭的以外の側面と関連していることである。栄養の不足や偏り、劣悪な労働(アルバイト含む)環境、劣悪な住居、時間の不足、希薄な家族関係、弱いソーシャル・サポート、孤立など、貧困との関連が立証されているさまざまな「不利」は枚挙に遑がない。不健康も、貧困に伴う「不利」の代表的な一つである。これらの問題は併発していることも多く、一つの「不利」が、次の「不利」を引き起こし、雪だるま式に課題が複雑化していく。すなわち、貧困とは、根幹には経済問題があるが、その顕現は多岐にわたり、これらが複合的に絡み合っている状況を指す。

医療機関や学校、福祉の現場においては、併発している「不利」、例えば健康悪化や低学力、不登校、いじめ被害など目の前の問題が着目され、の大きさから、経済問題が比較的矮小化されて理解されやすい。しかしながら、たとえ、保健の課題に対処するためであっても、背後にある経済状況や、家族、労働などの不利の蓄積に無関心であることはできない。

本報告では、まず、比較可能な1980年代から2010年代の貧困の動態を概観する。その上で、貧困の子どもの属性を精査する。一般的な印象とは異なり、貧困の子どもの過半数はふたり親世帯に属することや、年齢の高い子どもの方が、低い子どもよりも貧困率が高いことなどをデータに基づいて示す。次に、近年、多くの自治体が行っている子どもの生活実態調査の個票を用いて、貧困世帯の子どもの健康のみならず、学校生活、食生活、家庭生活(ヤングケアラーなどの家事・ケア負担)、家族との関係、交友関係、親の就労状況、親の健康などの状況を描写する。また、これらと子どもの健康との関係について考察する。子どもの貧困については、逸話的な報道や語りが多く、印象に基づいた判断がなされやすいが、データに裏付けられた実態を知ることは、子どもにかかわるすべてのプロフェッショナルに必要である。